

循環経済ビジョン研究会（第2回） 議事要旨

日時：平成30年8月2日（木）9:00～12:20

場所：経済産業省別館 944 会議室

出席者（敬称略）

出席委員：

細田座長、今井委員、小野田委員、喜多川委員、嶋村委員、田島委員、馬場委員、張田委員、平野委員、村上委員

ゲストスピーカー：

一般社団法人資源循環ネットワーク 代表理事 林孝昌氏

政府出席者：

経済産業省大臣官房審議官（環境問題担当） 信谷和重

経済産業省産業技術環境局資源循環経済課 課長 福地真美

経済産業省産業技術環境局資源循環経済課 課長補佐（総括担当） 荒田芙美子

事務局：

三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社 環境・エネルギー部 清水孝太郎、加山俊也

議題

- ・ 循環経済における価値創出のパターン（価値×プレイヤー）について
- ・ Circular Economy に関連した国際標準化動向について
- ・ プラスチック資源循環を巡る最近の動向について
- ・ 話題提供①（林氏、小野田委員）
- ・ 循環経済のあり方について
- ・ リサイクル事業者へのヒアリング調査結果について
- ・ 話題提供②（今井委員）
- ・ 資源循環を進める上での現実的課題について

議事概要（意見交換部分）

<循環経済のあり方>

- ・ 価値創出においては、生産・供給側における技術やサービスの変化から議論が進みがちであるが、需要側の変化も考慮する必要があるだろう。例えば、サブスクリプション型サービスが求められつつあり、こうした需要側と供給側の変化とをマッチングできれば現実的なビジョンとなるのではないか。
- ・ 日本人に醸成されていた「もったいない」精神は、戦後の大量生産・大量消費の時代により失われてしまったように感じるが、ビジョンを検討する際、「もったいない」等の我が国の特徴を何らかの形で結び付けられると良いのではないか。
- ・ 欧州ではCEが企業のマネジメントツールとして浸透しつつある。従来のリニアエコノミーを脱却し、より広いビジネスモデル、ライフサイクルでの管理が求められるようになってきている印象である。
- ・ CEの実現のためにも、ライフサイクル管理型ビジネスに移行することが重要。そのためにはマネジ

メントシステムを変える必要があるため、規制ではない形で移行を促進することができないか。

- ・ 「CE 2.0」といったキーワードは良い。イノベティブな現場では、着々と先進的な取り組みを進めており、それを社会や周囲の人々が後押しできるようなコンセプトとしてのビジョンが必要である。
- ・ 静脈産業と動脈産業の連携などは我が国の強みである一方、先端技術を提供するイノベーションサプライヤーやデータ活用等で付加価値を提供するプラットフォームとの連携が課題にならないか。
- ・ リサイクル事業単体での付加価値は小さく、過去を延長するだけでは未来がない。今後はプラットフォームとして、現存しない新たなビジネスモデルを作っていくことが求められる。
- ・ 出口・需要者に関する議論が後回しになってしまう印象がある。廃棄物の発生に依存するビジネスモデルから脱却し、売れるものをどう提供するかという出口を意識した視点に転換する必要がある。IoTはその際の課題解決方法として位置付けられる。
- ・ 人間・モノを接続するインターフェース、データ、指標の管理、プラットフォームがデータを取得しやすいようなルール形成の動向には注意を払う必要があるだろう。
- ・ 例えば「高度化」と「高効率化」のように、似たような表現で異なったニュアンスで用いられる用語も多く、用語の整理も必要である。
- ・ IoT化を進める上で最も重要な視点は、排出者の情報、誰が、いつ、何を排出しているか、について収集し、見える化することである。現状では制度的な制約もあるため、あるべき姿を「循環経済ビジョン」の中で打ち出せると良い。
- ・ IoT・AI技術の導入により、むしろエネルギー消費量は増える可能性もある。低炭素社会と今回検討するビジョンが矛盾しないように留意すべきである。
- ・ 新たな情報技術の導入により、人間の消費パターンが変わることも想定される。その消費パターンの変化が本当に望ましいものであるか慎重に検討する必要がある。
- ・ 循環資源を扱うプレーヤーは、天然資源メジャーに比べて資本力で劣る。また、投資に対するリターンが小さく、大規模な投資が難しい産業でもある。ESG投資、インパクト投資といったキーワードもあるが、循環資源を扱うプレーヤーとこれを支えるファイナンスを具体化していく必要がある。
- ・ 昨今のIoT・AI技術の進展やプラットフォームの台頭は、製造業にとって大きな危機だと感じているが、我が国リサイクル産業も同様の危機感を持つべきではないか。循環経済ビジョンでは、リサイクル産業におけるイノベーションサプライヤーとプラットフォームの育成が重要な要素となる。

<資源循環を進める上での現実的な課題への対応>

- ・ 我が国でダイナミックなビジネスを実現しようとする、その制度が課題となることも想定される。他で出来ていて、我が国で出来ていないことを現行制度の課題という点から検討する必要もある。
- ・ 情報技術を駆使し、企業間での連携や統合等を進めることは重要であるが、一方で足元の課題が疎かになり、“使用済み製品が処理されない状況”は避けるべきであろう。静脈産業が社会インフラであることを押さえた上で議論・整理を進めていく必要がある。
- ・ リサイクル産業は家業として発展してきた企業も多い。こうした企業の競争力をどのように高めていくかという視点も必要である。リサイクル産業の競争力強化にむけてのガイドラインを提示するなどといった後押しがどこかで必要になる場面も出てくるかもしれない。
- ・ 様々な切り口から業界のあり方を考えても良いのではないか。個社単位では小さくとも、情報技術を駆使し、ある程度統一的なサービスを提供できるようにしていくことも1つのあり方である。

以上